

やすだのほる
安田 登
 能楽師（下掛宝生流：ワキ方）
 寺子屋 講師 （阿弥陀寺）
 こどもおばけ合宿 講師 //

主著に『論語』『あわいの時代』『あわいの時代の『論語』ヒューマン2.0』
 『能 650年続いた仕掛けとは』他多数。

こままたとき 聖人の 親鸞鳥



イラスト 中川 学

「暮らしにくい世の中」

代に若者だった人は、将

てい

なんと

昭和四十年代、五十年

日本全体が貧しくなっ

い世の中になつたも

た

貧しいのは若者だけで

世界に目を向けてみて

所の先生から「保育料を

しかし、吉永は「貧乏

女優、吉永小百合の出

支え

▼誰にでも優しい

それでも大学入学資格

それはそれで仕方ないと、ゆるく許容していました。

以前、このコーナーで二宮金次郎（尊徳）のことを紹介しました。二宮尊徳さんは、地方を活性化するとき、まずは人々の心を耕すという、「心田開発」をしました。人々の心が耕され、そこに住んでいる人がやる気を起こせば、何もしくなくてもその土地は活性化するというのが尊徳さんの方法論です。

しかし、どうしてもやる気が出ない人もいます。それどころか尊徳さんのしようとすることに文句ばかり言う人がいる。

そういう人にはどうするか。

尊徳さんは「その人が困らないようにする」といいます。

やる気がないことや、いちやもんつけることもその人の「天命」です。それを無理に変えることをしてはいけません、できない。だからせめて、その人が困らないようにするのだというのが尊徳

さんの考えでした。

▼自己責任論って

ところが格差が広がる
と声高に叫ばれるようになるのが、この逆の「自己責任」論です。

これは能力主義から始まりません。能力主義自体はもろ悪くはありません。どんな生まれでも、能力や成果次第で未来を切り拓いていけるという夢も希望もある考え方です。

しかし、これが昂じると「勝ち組」と「負け組」を生みます。

そして勝ち組の人に「俺が成功したのは自分が努力したからだ。だからそれで得た利益は俺がひとり占めしてもいいんだ」と思わせてしまい、負け組の人たちに対して「お前が辛い状況にいるのは、努力が足りないからだ」となるのです。

これが「自己責任」論です。これは一見、問題ないように感じます。しかし、

その人が努力できたのは本当にその人だけの力でしょうか。私はクラスで半分以上が高校進学をしないという中学を卒業したので、本を読んだり、勉強をしたりするのが、「努力せよ」なんて言われてもできるものではないということを知っています。井戸に呼び水が必要のように、努力をするにも下地が必要なのです。

し、その人が努力できたのは本当にその人だけの力でしょうか。私はクラスで半分以上が高校進学をしないという中学を卒業したので、本を読んだり、勉強をしたりするのが、「努力せよ」なんて言われてもできるものではないということを知っています。井戸に呼び水が必要のように、努力をするにも下地が必要なのです。

人は本当に苦手なことには努力はできないものです。

▼他力だから救われる

親鸞聖人が、まだ比叡山で修行をされていた平安末期。日本全国では戦乱で多くの人が亡くなりました。また、天災や火災、あるいは疫病による死者も多く、死がとて身近にありました。

「人は死んだらどうなるんだらう」

「ちゃんと極楽に往生できるのだからか。成仏できるのだからか」

人々は死んだあとのことに不安を抱いていました。しかし、それまでの仏教は「自己責任」論。戒律を守れない人のことなんか知らん、というものです。

人々は死んだあとのことに不安を抱いていました。しかし、それまでの仏教は「自己責任」論。戒律を守れない人のことなんか知らん、というものです。

仏教では守るべき五戒というものがあります。

- ・ 生き物を殺しちゃダメ。
- ・ 盗みはダメ。
- ・ 不道徳な性行為はダメ。
- ・ 嘘をついちゃダメ。
- ・ 酒類を飲んじゃダメ。

人間、嘘をつかないなんてことは、できるはずがない。酒だつて飲んじゃう。そんなことをした人は地獄に墮ちるか、牛や虫に生まれ変わる。

成仏できる人はちゃんと修行をしたお坊さんか、あるいはたくさんのお金を使って、お寺を建てるような寄進をした人だけと云われていました。自己責任論です。

「俺はちゃんと修行をしたから成仏するもんね。お前ら、ふだんから嘘ついているから地獄。これ、

「罪を犯したけれども、お寺を建てたり、いっぱい寄進したから極楽に行けるんだよ。これもご先祖と俺の努力のおかげ」そんな自己責任論的な宗教でした。

「信じる者は救われる」当たり前」

「罪を犯したけれども、お寺を建てたり、いっぱい寄進したから極楽に行けるんだよ。これもご先祖と俺の努力のおかげ」そんな自己責任論的な宗教でした。

それに対して「いやいや。そんなことができない人でも極楽に往生できるよ。南無阿弥陀仏と御念仏を唱えるだけでいいんだよ」とおっしゃったのが法然上人です。

そして、それをさらに一歩進めて、「修行して悟りを得ようなんて考え自体が地獄への道。もうすべて阿弥陀様にお任せしちやおう」と提案したのが親鸞聖人です。親鸞聖人はおっしゃいます。

本願他力をたのみて自力を離れたる、これを「唯信」といふ（私たちが極楽に連れて行ってくださるといふ阿弥陀如来の本願の働きを頼み、自分で何とかしようという心を離れる。それを「唯信」という）

「信じる者は救われる」などといいますが、「信じる」という行為が自力です。そう簡単にはできません。「信じられない奴は地獄だ」と言っているようなもので、これこそ究極の「自己責任」です。だいたい信じられないから悩むのが人間です。しかし、親鸞聖人は「頼めばいい」とおっしゃいます。「頼む」は「頼る」です。

「そんな中途半端な気持ちで独立しようなんて無理だ。もつと修行をしてから出て行くようにしろ」という親の言葉を信じていることができずに家を飛び出して行った子どもが、一文無しになつて親を頼ってくる。信じることはできなくても頼ることはできるのです。

そして親鸞聖人は「頼むことが、そのまま『唯信』なんだ」とおっしゃいます。

自己責任論が横行する現代だからこそ、読み直したいのが親鸞聖人のお言葉です。